



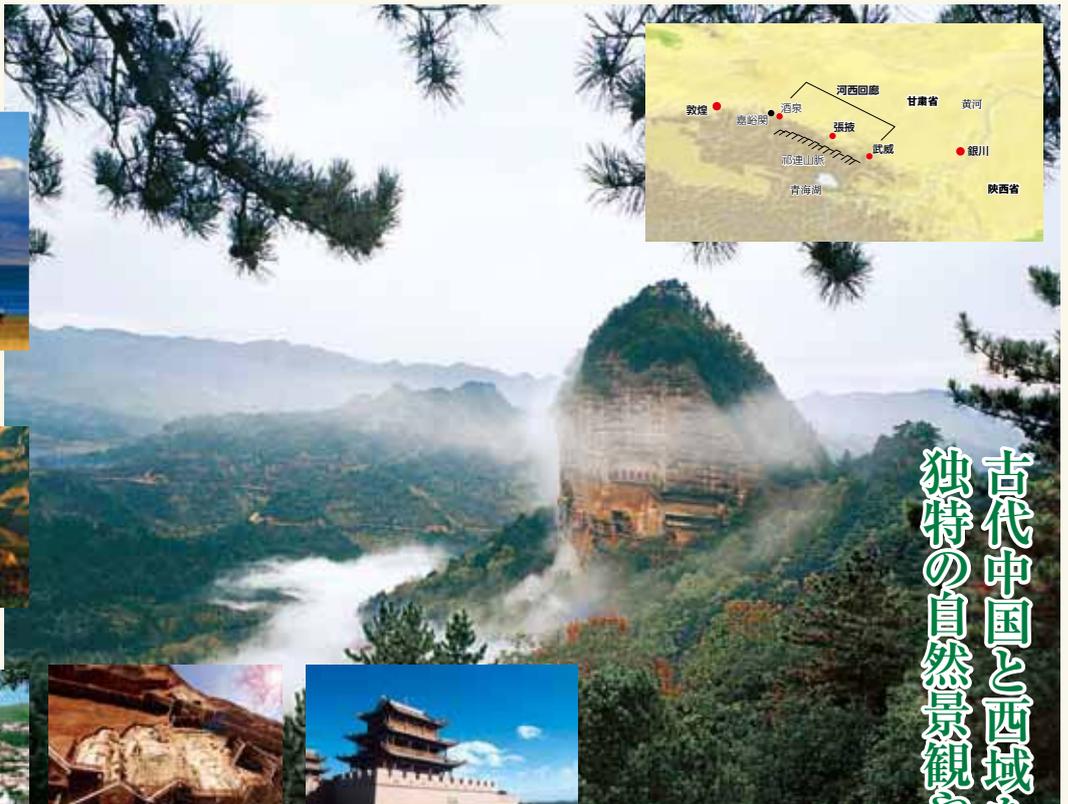
中国最大の内陸塩海湖として知られる青海湖



寧夏回族自治区の中心・銀川にある西夏王国の陵墓



チベット仏教ゲル派の寺院であるタール寺



中国五大石窟の一つ・麦積山石窟



保存状態が良く往時を彷彿とさせる嘉峪関の関城

霧の中に聳える麦積山には幽玄な雰囲気も漂います

古代中国と西域をつなぐ「河西回廊」 独特の自然景観や豊かな歴史文化が息づく

シルクロードは、東アジアと地中海世界を結ぶ交易路として知られていますが、商人だけにとどまらず、国の使節や武将、宗教家や芸術家なども旅したルートです。都市と国家を結んだ道は、また、仏教や美術、思想なども伝え、沿道地域の歴史と文化を育んできました。

チベット文化と中国文化の融合も

河西回廊は、いくつものルートがあるシルクロードのうち、最も基本的なルートの中国側の起点部分を形成しています。西安から西に向かう河西回廊がオアシス都市・敦煌を経由した後、シルクロードは、タクラマカン砂漠の北側と南側を通る天山南路と西域南道に別れ、カシュガルのオアシスで再び合流します。タクラマカン砂漠と天山山脈の間を行く天山南路は、唐の時代に三蔵法師が経典を求めて長安からインドへ向けて苦難に満ちた旅をしたルートです。

河西回廊のエリアはもともと遊牧民族が支配する異境の地でしたが、紀元前1000年頃に前漢の武帝が4つの直轄郡を置き、中央政権の支配が及ぶ遠隔地として、独自の華やかな文化を紡ぎながら、歴史が積み重ねられてきました。

河西回廊が通る甘粛省の南の青海省に

は、省都・西寧市の南西にチベット仏教ゲル派の創始者ツォンカパの生誕地として知られるタール寺があり、チベット文化と中国文化の融合の歴史を伝えています。

往時のスケール感と堅固さを今に

甘粛省の西北部にあつて河西回廊の中心部からやや西側に位置する嘉峪関市は古代シルクロードの要衝で、かつては「辺陲鎖钥」(辺境のくさりやかぎ)とも呼ばれていました。雄大な嘉峪関の関城は、万里の長城の西側の起点で、地勢の険しさと建築の雄大さで知られています。嘉峪関の関城は、明代の長城にある1000以上の関城の中でも最も保存状態が良く、往時のスケール感と堅固さを彷彿とさせてくれます。

甘粛省の省都・蘭州から高速道路で5時間ほどの天水市の東南約50キロには、中国五大石窟の一つに数えられ、「塑像の殿堂」「東方の彫刻館」とも称される麦積山石窟があります。中国の石窟は、西域北道を経て敦煌から河西回廊、黄河に沿って西から東へと造営されていったと言われており、敦煌の莫高窟が前秦の366年に創建されたのに対し、麦積山石窟は後秦の394〜416年頃に造営されたと伝えられています。その掘削は清王朝まで1500年以上にわたって続けられましたが、西秦から宋王朝までが最も盛んだったことから、現存する石窟も唐代より前のものが多いようです。